

『What Kendo is for me is...』

福島県

振武館須賀川市剣道スポーツ少年団

中学3年 須田日菜子

その日の英語の授業は、「外国のともだちに部活動を紹介する」というものだった。

I' m in the tennis club. I belong to the baseball club. テニス部や野球部の皆は生き生きと話を膨らませてゆく。好きな選手は誰？錦織選手です。イチローはアメリカでも有名ですか？説明の必要がない共通理解のもとに会話は進む。

さて、剣道部に所属する私は小さくため息をつく。...I' m in the kendo club. ケンドー？どんなスポーツなの？…ほら来た。竹刀という、バンブーで出来たスウォードで戦います。元々は日本のサムライのトラディショナルな武術です。防具をつけますが、何故か足ははだしです。一所懸命言葉を探しながら、でも、私は思っている。これは違う。今、私が説明したのが「剣道」では、ない。

そもそもいったい、剣道とは何ぞや。

「それで、ケンドーではどうやったらポイントをゲットできるの？」

アメリカ人は納得するまで質問をやめない。どうやったらって…それはジャッジやオーディエンスの心を打つ一本を決めたら、だよ。でも、そんなことを言っても伝わるわけもなく、上手に伝える自信もない。

「相手の、ヘッドかボディかハンドを叩いたらポイントです。」

言ってから後悔した。こんなの、剣道の説明じゃない。

そのヒットは、美しくなければポイントではない。気合がみなぎってなければジャッジの旗は上がらない。何より、打った後も相手の反撃に備えた心を残していることを示さなければポイントは取り消されます。十分に理解してもらえずとも、それを頑張って伝えるべきだった。話している自分に苛立ちが募る。

「年をとっても楽しめるスポーツなの？」

肉体のピーク時が剣道人生の高み、というわけではないんです。むしろ心のあり方が大切で…極めることはいつまでたってもできない競技というか…駄目だ、説明できない。

いったい、結局、剣道とは何ぞや。

また同じ問いがぐるぐると回る。と、その時、彼女の最後の質問に、虚を突かれた。

「それって、終わりはあるの？」

彼女が聞いたのはスポーツとしての剣道のゲームの終わり方だったのだろう。しかし、私の心には、剣道というものに終わりはあるのか、と聞こえた。

中体連が終わり、私は剣道部を引退した。いつかこんな風に、私の剣道は終わるのだろうか。もしそうなら、私が終わらせる、その「剣道」とは何なのだろう。

終わらない、と思う。仮に、竹刀をもう二度と握らなかったとしても、それは私の剣道の終わりではない。心を打つ一本を心掛けた日々はこれからの人生の、仕事や会社を生き抜く私の指針となるに違いない。

千日の稽古をもって鍛となし、万日の稽古をもって錬となす。一生を剣に生きた宮本武蔵が残した言葉と伝えられている。ただ兵法のことを言っているにあらず、その言葉には行間から立ちのぼる人生訓がある、と人は言う。もちろん、私にその奥義などわかるはずもない。でも、剣道で、相手に対峙して毎日毎日繰り返す足の運びの中に、その言葉が一瞬見えるような気がするときがある。暑くて寒い道場に、防具をつけ、はだしで臨む稽古の中に、私が培う何かはきっとある。剣鬼はまたこうも言う。其道にあらざるといへども道を廣くすれば、物ごとに出合事也。ならば、もしかしたら真剣に英語を勉強するのも、今の私の「剣の道」。

剣道は私の人生の道に繋がっている。それを伝えることができる日を目指して稽古に励む。剣道とは、きっとそういうものです。

It is the way of kendo, I think.

なんていつかかっこよく言えたらいいな。そう思いながら私は今日も竹刀を振る。